紫陽花

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紫陽花

【Ｎコード】
Ｎ９６１９Ｖ

【作者名】
きみよし藪太

【あらすじ】
兄ちゃんに女の人が会いに来た。
紫陽花の露を払い落しながら待っている彼女は、なんだか子供っぽい。
兄ちゃんはそんな彼女を、僕に迎えに行けって言うんだ。

膝丈の黒いスカートから伸びているふくらはぎは、静かに白くてそこだけ切り取ったかのようにぼんやりと目立っていた。けして細くない脚なのに、筋肉のバランスがいいせいなのかひどく綺麗に見える。隣の家の垣根から大きく飛び出した、珍しく薄ピンクと青色が混同している紫陽花をパタパタと叩きながら、彼女は歌うように小さく笑い声をあげている。さっきまで大雨が降っていたのだ、世界が一旦洪水で流されてしまうのではないかと思ってしまうような大雨が。

「ほら、紫陽花の中まで濡れてるでしょう、」

僕に気付いているのかいないのか、そもそもそんなことは少しも関係がないのか彼女は喋り始める。意外と甘い、高めの声だ。

「雨がたくさん降ったのよ、小粒な雨がたくさんたくさんね。大粒の雨だと中まで浸透しないもの、紫陽花は小さな花がそれぞれ傘みたいに雨粒をはじいちゃうから」

「……あの、真由利さんですか、」

「うん、そう」

ここの紫陽花珍しいのね、と彼女は僕の質問にさらりと答えてから、もっとさらりとそう言った。どうして見も知らない子供が自分の名前を口にしたのかなど、彼女にはまったく興味がないらしい。

「珍しいって、」

「だって、アルカリ性の土か酸性の土かで紫陽花の花の色は決まるんじゃなかったかしら。同じ場所から生えているのに、赤もあるし青もあるしなんて、珍しいじゃない」

彼女が紫陽花を叩く。たっぷりと水分を含んだ花は揺れて、パタタ、パタタタタ、と雫を降らせる。雲の切れ間から月が顔を出していて、それが奇妙に明るかった。雨が降った後の空は浄化されすぎていて、身体に毒なのではないかと思われるくらい清んでしまう。

「あの、真由利さんなんですよね」
「うん、そうだってば、君も名前聞いて欲しいの？　でもわたし、君の名前知らないよ？」
「知らなくていいです、あの、健司の弟ですけど」
「知らなくていいって言っといて身分は明かすのね、ああ、君が健ちゃんの」
　真っ茶色な髪はうなじが隠れるくらいのショートカットで、短いのに彼女が風を起こすとふわりと揺れた。健ちゃん、と呼ばれるのに不似合いな、僕は自分の兄を思い浮かべる。目が細くていつも好戦的な光を宿していて、薄い唇は人を小馬鹿にしたような笑みしか浮かべず、背が高く胸板があるのでとても威圧的に感じられる兄は、ちゃん付けがこの世で最もふさわしくない男だと思う。
　健ちゃん、に僕が変な顔をしてしまったせいか、彼女もどこか不安そうな雰囲気を眉の間に漂わせた。
「違うの？　違う健ちゃんの弟さんなの？」
「違わない健司です、迎えに行けって、兄ちゃんから」
　パシ、と彼女が水分を含みすぎた紫陽花を叩いた。パタタタタ、と落ちるし雫は既に濡れているアスファルトの上で音楽でも奏でようとしているかのようだ。
「若く見えるのね、十代みたい」
「まだ中学生ですから、十代です」
「そうなの？　健ちゃんは随分年の離れた弟がいるのね、知らなかった」
　兄は今年丁度僕の年を倍にした数の年になる。兄が僕の年齢の時に、僕は生まれた。学校でも家庭でも暴力を振るう中学生だった兄はいつか傷害事件で捕まるか殺人事件でも起こして捕まるか誰かに殺されるか、高校も行かずヤクザになってしまうかとにかくひとり息子がこんなだったらどうしようもないので、と両親が僕を作ったのだ。計画的に僕は作られてこの世に生まれてきた、両親の面倒を見るために、というか、うちの両親は兄のことを意外と楽観視して

いたのではないかと思うけれど、結局グレるのは中学で辞めてしまって、兄は今普通に高校を出て大学を出てちゃんと就職して生活費まで納めている。僕は孫のような可愛がられ方で両親に甘やかされているけれど、兄はそんな僕を見て横目で笑う。

僕は兄が暴力的だった頃を知らないし、確かに今だって怖い雰囲気をふんだんに振りまいてもしも他人だったらなんだか怖くて嫌だと思うかもしれないけれど、給料日には両親が身体に悪そうだからとけして食べさせてくれないハンバーガーなんかをこっそり買ってきて、ドロドロに溶けてしまってるシェイクや冷めてぽそぽそになっているポテトと一緒に僕の部屋の前に置いておいてくれる兄は嫌いじゃない。どちらかといえば、憧れに近い感情で、好きだと思う。

「でもそう言われてみれば、健ちゃんにちょっと声が似てるのね、うん、君も女泣かせになるのかな」

「真由利さんは、兄ちゃんの彼女？」

「違うよ、彼女だったら他の誰かに迎えなんか行かせる？」

どうだろう、と僕は考えてみる。兄なら行かせそうだ、相手が恋人であれ両親であれ、総理大臣であれ神様であれ。本当に好きな人なら、男でも女でも関係なく迎えに行くかもしれないけれど。

「じゃあ、友達？」

「そうだねぇ、身体の関係を含めても友達と呼べるなら、って、呼べるか、友達と寝ちゃいけない法律はないもんね」

恋人ではなくて身体の関係を含めた友達であって、きっと真由利さんは兄のことが好きなのだろう。

「君はもう女の人を知ってるの？」

「女の人を知ってる？」

「経験があるのかどうかってこと」

僕はまだ人に本当の意味で恋焦がれてどうしようもなくなったことはないけれど、誰かが恋をしているのを見るのは好きだ。存在がやわらかくなって、人間が不透明になる。人は恋をすると不透明になる、気付いて欲しくて透明ではなくなる、色付きで静かにやわら

かく濁る。
「経験、は、ないですけど、」
「経験は？　じゃあ、何があるの？」
「何もないですよ、そういう類の話は苦手なんです、」
「ふうん、まだ中学生だもんね。そっか、じゃあ、わたしとする？」
「何を？」
「経験」
しないです、と僕は首を振る。兄の代わりにされるのも、おもちゃにされるのも、嫌だった。僕は世に言う夢見る処女ではないけれど、初めてするなら好きな人とが良かった、それは兄が教えてくれたからだ。男もな、どうでもいい女とするよりは好きな女とした方が何千倍も気持ちいいぞ、と。どうでもよくない好きな人とするのは、軽い緊張があってだけれどリラックスもできて、自分が求められているのが性欲のみではなくてもっと身体全体の肌だとか体毛だとか爪先だとか相手の些細な全てから感じられていいんだ、と、いつか酔って帰った兄に水を汲んであげた夜更けに聞いた。普段はそういう話をまったくしないので、兄も酒の力で多少開放的になっていたのだろう。
目の前の彼女は肉付きのいい魅惑的な体つきをしていたけれど、そういうのは好きという感情ではなくてただの性欲から欲しいと望んでしまうだけであって、僕は性欲からだけで初体験を済ませてしまうのは嫌だった。好奇心のみから、でももちろん。
「そう、しないの、それは残念」
少しも残念そうではない声色でさらさらと笑って、彼女はもう一度紫陽花を叩いた。雨が浸透したのね随分、とまた笑う。
真由利って女が近所まで来てるはずだから、ちょっと迎えに行ってくれよと兄に言われたのは雨がやんだ後だったろうか前だったろうか。ちょっと迎えに、と言っても兄はこの人を家に入れるつもりなのかどうなのか、僕には分からない。待っているかな、と思った、待っていないだろうな、とも思った。本当に会いたい人だったら、

兄は自分で迎えに行くだろう。
「あ、星まで出てきた」
雲の切れ間は月の光でやわらかく照らされていて、その間から小さな星が知って見える。雨が上がって、月も星も出てきて、だけれど彼女が会いたがっている兄は出てこない。
「迎えに行けって、言われたから、」
そろそろ行きませんか、と提案してみる。行く、と言っても自分の家に連れて行けばいいのかどうなのか分からないけれど、彼女は僕がどうにかしなければずっとここに居そうに見えた。兄に会いに来たのではなく、紫陽花でも叩きに来ただけの、散歩途中の人みたいに。
「迎え、ね、健ちゃんはわたしに会いたいのかな、」
兄ではないから分かりません、というのも冷たいし、会いたくなければ迎えに行けなんて言いませんよ、と笑ってあげるのも難しく、僕はしばし黙り込む。どんな言葉よりもひどいのは、タイミングのが悪い時の沈黙だ。
「……多分、」
消え入りそうな小さな声が出てしまい、彼女の不安を煽ってしまっただけだったかもしれなかった。兄はこの人に会う気もないのだろう、会うなら会うし会わないなら会わないし、彼女の好きにすればいいと思っている。彼女も彼女で、図々しくなりきれなくて、相手の顔色を窺ってもしも、もしも会いたいと言ってくれたら、と望んでいる。大人はややこしくて面倒くさそうだ。それはあくまで僕の憶測でしかないから、ふたりには本当の真実が別にあるのかもしれないけれど。
「……やっぱり帰ろうかな、」
「なんで、」
「え、なんとなく。君には迎えに来てもらったりまでしたのに悪いけど、うん、なんか、ね」
帰ろうかな、といいつつ彼女は回れ右をしないし、両手を後ろに

繋いで意味もなく脚を広げたり閉じたりしている。帰ろうかな、は、帰らないでって言って、の意味らしい、女ってものもややこしくて面倒くさいらしい。

「ね、帰ったほうがいいと思う？」

自分がどうしたいか、なのに、他人に意見を求めようとする、うちのクラスの大崎とか南原とかの女子もそうだ、女って、と僕は思う、自分の欲しい意見の時は「そうだよね！」と言うくせに、反対意見だと「そうかな、でも、」とか言い続けて結局自分の意見を肯定してくれる人が出てくるまで待っていたりする。それなら、誰かの意見を聞くなんて意味がないのに、わたしは帰りたくなくて健ちゃんに会いたいけどどうしよう、と相談してくれた方が何倍もマシなのに。そうしたら僕だって、弟、とか、幼い、とかの特権を使って、「兄ちゃーん、真由利さんって人が会いに来てるよー！」なんて、無邪気と無神経を装って呼んで来てあげたり、それなりにいろいろしてあげられるのに。

帰った方がいいと思う、なんて聞き方は、ずるい。

答えはたったひとつしか用意されていないかのように、誘導されてしまう。

「……帰らなくても、いいと、」

思う、と続けた語尾はほぼ尻上がりの疑問系だった。

「あー、でも……そういうのは結局本人が決めることだし」

「健ちゃんはわたしに会いたがってるかな、」

兄が、じゃなくて、彼女が会いたがっているのに、そこでの責任転嫁はちょっと違う。だけど僕は何も言わなかった。会いたがってるよ、は嘘になるし、会いたくないって、も嘘になる、僕は兄ではないし僕以外の誰かの考えがはっきり分かったりはしない。

「真由利さんと兄ちゃんがどういう関係かいまいち分かってないから何とも言えないけど、自分がしたいようにすればいいと思う」

「健ちゃんの弟なのに割とまともな事を言うね」

「責任押し付けられるのが嫌なだけです」

責任？　わたし何か責任押し付けた？　などときょとんとした顔で聞いてくる彼女に、僕は小さく首を振る。自分以外の誰かに決められた選択を取ったら、自分以外の誰かを責める権利も手に入れるということじゃないか、そんなのは僕程度の子供だって分かる。
「会いたかったら会えばいいし、会わないほうがいいなら会わなければいいんだし」
「うーん。わたしさ、妊娠してんだよね」
「……は？」
あ、違うよ、と彼女は慌てたように顔の前で手を振った。何が違って何がなんなのか、僕はあっという間に混乱する。
「はい？」
「違うの、健ちゃんの子とかじゃないよ？　違うの、本当に、全然違う、違う人の子。彼氏の子」
彼氏のいる女がどうして夜中にうちの兄に会いに来るのだ、しかもさっき身体の関係を含めた云々と言っていたくせに、と思い切り怪訝な顔をしてしまったせいだろう、彼女はさっきよりもスピードを上げて、顔の前で手をぶんぶんと振る。
「健ちゃんと関係あったのも昔のことだし、健ちゃん好きなのは確かだけどでも健ちゃんわたしのこと別に友達以上に思ったりしてないし、いや、なんかね、このまま彼氏と結婚するのも嫌じゃないし逆にきっかけができて良かったくらいで、でもなんでだろ、健ちゃんに会っておきたいなって言うか、最後になんかこう、わたしが誰かのものになっちゃう前に、っていうかね、」
「……兄ちゃんは妊娠してる人とセックスしたりしないと思う」
「いや、そんなことを望んでいたわけでは、……えー、望んでたのかな、わたし」
「知らないけど」
「うん、なんだろうね、なんかこう、健ちゃん好きなのよ」
兄は彼女の妊娠のことを知っているのだろうか。聞いてみたら、知らないと思うよ、と言われた。君に話したのが初めてだし、と続

けられる。ということはこの人の彼氏も両親も友達も知らないことを僕が真っ先に知ってしまったということか。あまり嬉しくない特権、というより、興味がない事柄。
「うーん、帰る、帰ることにしようっと」
違う男の子を腹に入れておいて好きです、とか言われても説得力ないだろうしね、と彼女は笑った。妊婦さん、と言ってもどうせまだ二ヶ月かそこらでちっともお腹なんか目立たなくて、それでも足腰を冷やしてはいけないんだろうな、というのだけはなんとなく分かるので、僕は提案をしてみる。
「兄ちゃんに送らせます」
「え、でも、」
「どうせ真由利さん、兄ちゃんに電話とかしてきたんでしょ、迎えに行けてっ言ったのは兄ちゃんだし、迎えに行ったから兄ちゃん送って帰れって言ってくるから」
「なんか、悪い、」
「悪いも何も、もうここに来ちゃってること自体がアレなんだから」
だからちょっと待ってて、と僕は回れ右をした。帰ろうかな、と言った彼女はこちらを向いたままだった。変なの、変だけど、仕方ない。
兄に、「使えねぇガキだな」と笑われるだろう。兄はそういう人だ。自分が迎えに行かなかったことで察して帰れ、という人だ。だけど今回は例外だから仕方ない、女子供には優しくしないといけない、ふたつがセットになっているなら尚更。
「本当にちょっと待ってて、」
途中で振り返ってそう声をかけた、彼女が帰ってしまうと思ったからだ。念を押す時に僕は彼女がまた紫陽花を叩いているのが見えた、紫陽花は雫をパシパシと降り散らす。あれは照れ隠しだ、と僕は思った。子供じみた行動を取ってしまった自分を恥じて照れているので、あんなことをしてるんだ、きっと。
大人で女っていうのはややこしくて面倒くさい、と苦笑する。行

動なんて僕より子供みたいなことをして。それなのに母親になるらしい、すごいことだ。

「兄ちゃーん、」

玄関まで走っていって叫んだら近所の犬がワンワンワンワン吠えた。ベランダの窓がカラカラ開いて、タバコを咥えた兄がにやりと笑いながら顔を出す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9619v/

紫陽花

2011年8月20日22時39分発行